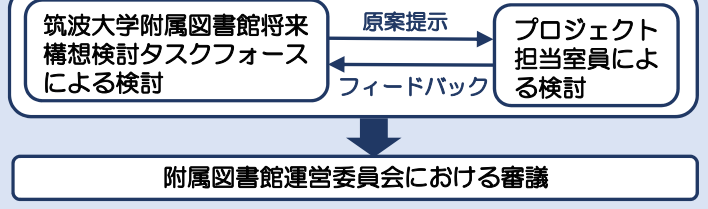


筑波大学附属図書館における中期目標（2022-2027）の策定

◆担当室員

研究代表者：熊淵 智行（学術情報部）
研究分担者：逸村 裕（図書館情報メディア系）
宇陀 則彦（図書館情報メディア系）
島田 康行（人文社会系）
谷口 孝介（人文社会系）
協力者：筑波大学附属図書館将来構想検討タスクフォース

◆検討プロセス



設置期間：令和元年5月30日（附属図書館運営委員会承認）～
設置目的：第4期中期目標・中期計画期間（令和4年度～令和9年度）を想定した附属図書館の将来構想の検討
構成員：学術情報部長、情報企画課 & アカデミックサポート課の各課長・主幹

【これまでの附属図書館】

筑波大学附属図書館は、学生のための学習図書館であり研究者のための研究図書館として機能すること、全学の図書館をトータルシステムとして一元化し資料管理と情報を集中すること等の考え方に基づき運営されてきた。中央図書館と専門図書館が一体化した組織として機能し、また、全面開架方式や長時間開館等の特徴とする管理・サービスにより、本学の学術情報基盤として教育・研究活動や学習を支える役割を果たし、さらには、ボランティア活動を支援することにより地域の生涯学習活動を支える機能も果たしてきた。

【解決すべき主な課題】

- 電子化の進展やモバイル端末の普及等に伴う利用行動の変容
- デジタルヒューマニティーズの進展等の学術情報の様相の変化
- 継続する海外学術雑誌の価格高騰とオープンアクセス化の潮流
- 慢性的な資料保存スペースの狭隘化
- 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う教育・研究活動の変化→オンライン授業の拡大等に伴うデジタル化推進の必要性、場所（学習スペース）としての図書館機能の再検証）
- デジタル技術を活用した機能向上やサービスの拡充・促進の必要性

【関連する学内外の動向】

- 筑波大学における第4期中期目標・中期計画（案）
 - 国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン2025～（令和3年6月25日、国立大学図書館協会第68回総会）
- 等々



「筑波大学附属図書館中期目標2022-2027」

（令和4年2月22日 附属図書館運営委員会承認）

附属図書館は、学内外の関連機関等と連携・協働し、多様な学術コンテンツや学習空間・設備・人材等の資源を活用した「学術情報プラットフォーム」として機能し、学際的かつハイブリッド型の学習・教育・研究支援を行うとともに、地域・国際社会とのハブとしての役割を果たすことを目標とする。

【目標達成に向けた重点事項】 ※目標達成に向けた4つの重点事項（各々の重点事項に対応した12の活動指針も策定）

◆ 研究力強化ならびに学びの質の向上に資する学術資料の整備

本学の研究力強化及び学びの質の向上に資するため、研究、教育及び学習活動を支える学術情報基盤として必要な学術コンテンツを整備し広く提供する。特に、アクセスに時間的制約や空間的障壁等の少ない、電子的に利用可能な資料（電子ジャーナルや電子書籍等）を充実させ、その利活用を推進するためのサービスを展開する。

なお、資料の収集から配置・保存・廃棄に及び「筑波大学附属図書館蔵書構築方針」を策定（令和4年2月22日附属図書館運営委員会承認）し、書架の狭隘化に対する具体的な取り組みを含む、冊子と電子総体の学術資源の適切な保存・活用を実現する。

◆ 教育や学習を効果的に支援する利用環境の整備及びサービスの提供

本学におけるチュートリアル教育や学際型教育、設置が予定されているマレーシア分校における教育等の展開を踏まえ、学習図書館として教育や学習のための効果的な利用が可能な空間の整備を進める。また、物理的な施設整備のみならず、学びの手段や機会の多様化に対応するためネットワーク上でのサービス機能を拡充する。

◆ オープンアクセス及びオープンサイエンスの推進

本学の最新の研究成果や貴重資料を含む附属図書館が所蔵する学術コンテンツ等の本学知的資産の発信・公開により学内外ステークホルダーへのプレゼンスを高める。そうしたオープンアクセスの推進活動に加えて、研究データの公開・共有・利活用まで含めたオープンサイエンス化にも対応できるよう、つくばリポジトリ上での研究データの登録・管理・利活用等をも可能にする。

◆ 情報発信、社会貢献

附属図書館の活動の可視性を高めるため、効果的な情報発信を行うとともに、筑波研究学園都市内に位置する大学として、地域との連携活動を推進することで社会貢献を果たす。

【今後の展開】「筑波大学附属図書館中期目標2022-2027」の活動指針を附属図書館の業務計画等に反映